



教授の呟き

第12回

師走でもスローライフのゆとりを

東京海洋大学教授

苦瀬博仁

●●● 師も走るし、商品も動く年末

「師走だから、先生も忙しいでしょう」という古典的な冗談が飛び交う季節になった。「年末以外は、よほど暇と思われているのかな」などと、すねたりもしたくなるが、確かに用事は立て込む。

平常月の何倍もの商品が動くメーカーもあれば、歳末商戦で奮闘しているデパートもある。商品も動き輸送量も大幅に伸びるから、ロジスティクスにかかわる人々の師走は、すべからず忙しい。しかし、品質を落とすことはできない。ロジスティクスの5R（right time、right place、right price、right quality、right quantity：正しい時刻・場所・価格・品質・量）のもとで、商品を顧客に届ける必要がある。

「『縮み。志向の日本人』と言われるように、時間通り、寸法通り、重量通りなど、わが国では枠や型にはめることが好まれるようだ。だからこそ、限られたコストの中での「時間通り、寸法通り、重量通り」が、無駄のない効率的な生産・流通体制を実現している面もある。⁽¹⁾

しかし、無理はいけない。

●●● ゆとりの消滅がミスにつながる

事故やミスはどんなときに起こるか、安全工学の専門家に聞いたところ、「『ゆとり』を失ったときが危険」とのことだった。無駄は省かな

ければならないが、「ゆとり」を無くしてはいけない。

最近、名だたる大企業に火災や事故が続いた。いずれの会社も、生産管理や物流管理では超一流なはずである。なのに、事故が起こった。

「無駄」を省くことで、「ゆとり」まで無くしてはいないかと危惧している。

●●● 品質競争とスローフード

スーパーでは、総菜の一部が日付け管理から時間管理に移行している。新鮮であるに越したことはないが、1分1秒の鮮度を気にするのであれば、自ら作れば良さそうな気もする。リンゴやトマトも家で食べるのであれば、何も同じ大きさや形でなくてもよいだろう。多少の不ぞろいは、それなりに自然を身近に感じさせるし、当たり外れも楽しめる。不ぞろいを楽しむ「ゆとり」があってもよい。

われわれは日常生活でも規格に過敏になり、過剰な品質を要求して、結果として割高で危うい生活に傾斜しているような気がする。

この反動なのだろうか。わが国でも、スローフードやスローライフという言葉をよく聞くようになった。「土地の産物を用い、素材の質が高く、生産法が独自で、地元へ活力を与える生活」という趣旨があり、地産地消（地域の産物を、地域で消費する）という言葉もある。⁽²⁾

ならば地産地消により、地元の物

製品の消費が進み、商取引が沈滞するのだろうか。それとも、地酒ブームのように都会の人が各地の名産品を探し求めたり、「より遠くへ、より多く売りたい」という商取引の基本原理に従って、流通も活発になるのだろうか。

●●● スローライフな年越し蕎麦

今年も大晦日には、蕎麦を食べることになるだろう。

蕎麦粉は外国産かもしれないが、いつものように家でテレビを見ながら食べるもよし。下町の老舗の蕎麦屋に、出かけるもよし。いっそ車で遠出して、地の蕎麦に出会うもよし。

蕎麦通は、まるでJIT（ジャスト・イン・タイム）のように、挽きたて打ちたて茹でたてを喉ごしで味わうそうである。通ではないが、昼時のせわしない蕎麦とは違って、たまには腰を落ち着けて、お猪口でチビリとやりながら蕎麦の出来上がりを待ってみたい。下司（げす）かもしれないが、一気にすすらずに味をかみしめてみたい。

スローフード・ブームが流通やロジスティクスに与える影響を考えながら、のんびりと蕎麦を楽しんでみようと思う。これが「師走のスローライフ」になるならば、これもまた良しである。

(1) イー・オリオン（李御軍）：「縮み志向の日本人」、学生社、1982

(2) 島村菜津：「スローフードな人生！ーイタリアの食卓から始まるー」、新潮社、2000



Profile

東京海洋大学 海洋工学部
流通情報工学科 教授
苦瀬博仁

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授を務める。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通ー都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)

